

会議名	平成 18 年度野菜茶業課題別研究会 「野菜生産における家畜排泄物利用の現状と課題」
開催日時	平成 18 年 10 月 23 日（月）13：00～17：10
開催場所	農林水産技術会議事務局筑波事務所内 農林ホール（つくば市観音台 2－1）
主催者	野菜茶業研究所 共催；畜産草地研究所
参加人数(概数)	約 200 名（県関係 127、機構関係 43、団体 19、大学 3）。出席者名簿参照。
1. 会議の概要 （資料添付）	<p>我が国の露地野菜産地では、専作化と連作による地力疲弊が顕在化しつつあり、消費者の有機畜産物に寄せる関心は高い。一方で、家畜排泄物問題の解決が畜産の発展に極めて重要となっており、地域資源として積極的に評価しようとする行政施策も取られつつあり、水稻や野菜作などで家畜排せつ物の耕地への還元利用による耕畜連携の推進が図られてきた。しかし、野菜生産の現状から十分成果を挙げているとはいえず、その原因の一つは、畜産および野菜生産研究に携わる関係者間の意思疎通の欠如による。そこで、この研究会は、両者のコミュニケーションを取る場とし、我が国の野菜生産および畜産の持続的発展に寄与することを目的として開催された。この研究会に出席し下記のような項目について収集した新たな状況の中での、家畜排せつ物の位置づけの検証と新たな課題についての情報について報告する。</p> <p>第 1 日目</p> <p>1. わが国における家畜排せつ物の処理問題と利用状況</p> <p>1) わが国における畜産業の展開にあたって喫緊の課題となっている家畜排せつ物について；代永 道裕（畜草研）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・全国で生産された堆肥が全農地に均等に還元されれば窒素過剰にはならない。</li> </ul> <p>2) 家畜糞堆肥の製造過程と流通利用されている堆肥の品質実態； 小堤 恭平（畜環研）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・微生物の働き。・堆肥化施設。・堆肥化の技術的および流通利用の課題。・堆肥の品質データベース（コンポテスターによる）、同一成分の堆肥はない。・耕畜連携による堆肥の利用、未利用地・遊休地・耕作放棄地等の利活用により利用拡大。</li> </ul> <p>3) アンケート調査結果に見る野菜生産における堆肥利用の現状と問題点； 東尾 久雄（野茶研）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・（都道府県）今後取り組むべき研究の方向「養分量の少ない堆肥製造技術の開発」「長期連用試験結果に基づく計画的な施肥設計の確立」「有機物の施用が生産物の品質に及ぼす影響の評価」。</li> </ul> <p>2. 耕畜連携の先進事例に学ぶ</p> <p>1) 堆肥センターを核にした耕畜連携の取り組み；石田 元彦（中央農研セ）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・K 市堆肥センターに事例調査から）、稲発酵粗飼料の評価を高めることが重要で、粗飼料の特性を踏まえた育成から成牛までの体系的な飼養管理と給餌方法を構築することが重要なポイント。</li> </ul> <p>2) 広域流通を可能にする成型堆肥製造技術の開発と野菜作への利用； 薬師堂 謙一（九州沖縄農研セ）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・成分調整成型堆肥の生産・利用技術に開発。</li> </ul>

	<p>3. 地域資源としての家畜糞堆肥の利用におけるメリット・デメリット</p> <p>1) 家畜ふん堆肥の園芸利用にあたって；後藤 逸男（東京農大）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地力が高まりすぎた園芸土壌、その一因は家畜堆肥。・地力の低下が進む水田土壌にこそ家畜ふん堆肥。・完熟するほど窒素が効かなくなる家畜ふん堆肥。</li> <li>・化学肥料との併用が合理的な家畜ふん堆肥。・家畜ふん堆肥を活用するには肥料取締法の問題点を解決するための抜本的な行政措置が講じられるべきである。</li> </ul> <p>2) 野菜生産サイドから堆肥供給サイドにお願いしたいこと；</p> <p style="text-align: right;">熊谷 均（鳥取県園試）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・堆肥の製造側・利用者側それぞれがその必要性やメリットを理解せず、取り組みに対して自主性を欠いている面もあり、まずは、両者の意思疎通、意識改善が喫緊の課題。</li> </ul> <p>3) 堆肥供給サイドから堆肥利用サイドにお願いしたいこと；</p> <p style="text-align: right;">真部 幸子（茨城県畜セ）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・家畜ふん堆肥の使い分け。・湖沼汚染には生活廃水も寄与、水源を守るという共通の目的のために、環境負荷低減・資源循環。・局所的な窒素収支だけでなく、地域全体における窒素負荷低減効果も含めた検討や、生産物への評価を期待。</li> </ul> <p>4. 野菜生産への家畜排泄物の利用に関する最近の研究事例</p> <p>1) 耕畜連携共同研究「家畜ふん尿の高度処理・利用による高品質野菜野菜の環境保全型持続的生産システムの開発」；徳田 進一（野茶研）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・野菜茶研と畜草けんの共同研究として2002年から畜草研圃場で大規模な堆肥連用試験を継続中。</li> </ul> <p>2) 家畜ふん尿処理液の野菜水耕栽培への利用；切岩 祥和（静岡大）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・さらに検討すべき課題が多い、衛生面の安全性、安定性、微細な沈殿物の除去などがあるが、高濃度トマト生産への利用に可能性もある</li> </ul> <p style="text-align: right;">第2日目の現地見学；畜草研、JAつくば谷田部堆肥センター（参加しなかった）</p>
2. 今後の研究開発分野として重要と思われる話題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・堆肥生産に利用される添加微生物剤の効果判定手法。</li> </ul>
3. その他の発表課題で関心のあったもの	<ul style="list-style-type: none"> <li>・稲作への家畜堆肥利用が技術的な可能性が最も高いようだが、現状では構造的に無理なようだ。</li> </ul>
4. 今後研究開発課題採択に当たって参考とすべき事項等	<ul style="list-style-type: none"> <li>・消費者の国産野菜の支持と野菜の高値が続くとすれば、野菜生産への家畜堆肥利用技術の開発も必要であろう。</li> </ul>
5. 会議の所感	<ul style="list-style-type: none"> <li>・この研究会への出席者の顔ぶれを見ると、畜産関係者が25%、普及関係が5%程度で、他分野の研究者の関心が高まっていることを伺わせ、今後の技術開発がようやく期待できるようになったと感じられた。</li> <li>・発表課題が多過ぎて総合討論もなく、詰め込み過ぎた感を否定できなかった。もっと焦点を絞り、連年開催も考えるべきであろう。</li> </ul>
報告者	針生 程吉